



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 3

ア ル プ ハ ヲ リ イ ズ ト

さとう

Satou



アルファライト文庫



ルシコアー

魔界都市
ベルゼブブの市長。
とんでもない秘密を
抱えている！

シエラ

イタズラ好きな
神話七龍のお姉さん。
アシュトを
優しく見守る。

エルミナ

希少種族ハイエルフの
美少女。どう見えて
大のお酒好き。

アシュト

本作の主人公。
魔法適性が「植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーベルシュタインの
領主となる。

フレキ

アセナの兄。
薬師のタマゴとして、
アシュトの弟子となる。

アセナ

ワーウルフ族の少女。
なぜか早く大人に
なりたらしい。

シロ

ユグドラシルを守る
フエンリルの子供。
アシュトと遊ぶのが
大好き。

CHARACTERS

主な登場人物

皆さん、こんにちは。俺の名前はアシュトと言います。たまには礼儀正しく、敬語で自己紹介をさせていただきます。

俺はビッグバロッグ王国の大貴族エストレイヤ家の次男坊だったので、魔法適性が『植物』という微妙なものであったために、父から「落ちこぼれは必要ない」と言われ、未開の森オーベルシュタインに追放されることに。俺は途方に暮れながらも、オーベルシュタインでのんびりとした第二の人生を過ごそうと決めたのでした。

そこは自然が豊かな場所です。俺の『植物』魔法は大活躍。しかもひよんなことからハリエルフやエルダードワーフ、デーモンオーガといった希少な種族が集まり、村ができて……いつの間にか村長と呼ばれるようになりました。

最近では、新しい種族がまた増えました。

花の妖精ハイビクシー、鉱山採掘のプロであるブラックモール族、ちよつと胡散臭いディボロス闇悪魔族や、全身が真っ赤な鱗に覆われているサラマンダー族など……気付けば村は希少種族だらけです。

さらに、ビッグバロッグ王国の同盟国である『ドラゴンロード王国』のお姫様、ローレライとクララベルの姉妹も村にやってきました。この二人は来たというか、大怪我して運

ばれてきたつてのが正しいですけどね。

その他にもエルダードワーフたちが村に巨大図書館を造ってくれたり、村の近くにある巨大な湖に出現した大マナズを退治したりと、のんびりとはかけ離れた出来事が続く。

俺はスローライフを送りたいんだけど……やっぱ、トラブルつてのは続くんだよねあ、と思う今日この頃です。

第一章 人狼の訪問者

それは、突然やってきた。

「た……助けて、ください」

サラマンダー族が、酷い怪我をした見知らぬ男性を俺の家に運んできた。

なんでも、村の入口で倒れていたそうさ。

診察室に連れていき、さっそく治療を開始する。

「……怪我、だけじゃないな」

男性は全身に裂傷を負い、そして……深刻な栄養失調に陥っていた。肋骨が浮き出るほどやせ細っている。

俺は一番怪我が酷い背中にハイエルフの秘薬を塗って治療したあと、ハーブスूपを飲ませてやる。弱った身体には三種のハーブを混ぜたスूपが一番。殺菌作用、体力回復の効果があり、何より美味い!!

おっと、そんなことはどうでもいい。

俺は安心させるように、男性に言う。

「魔獣にやられたようですね。ゆっくり休んで回復したら、住んでいる場所まで送りましょう」

「……はい。あの、あなたはこの村の……?」

「はい。村長のアシユトです」

「おお、噂の村長ですか!!」

「は、はあ……噂がどんなものかわからないけど、たぶんそうです」

今までにも何度か「噂の村長」と呼ばれていたし、まあ今回も俺のことだろう。

男性は、ベッドの上で頭を下げた。

「お願いします!! どうか、うちの村を救ってください!!」

「え?」

「実は……うちの村に、疫病が発生したのです」

「……詳しく聞かせてください」

男性から「疫病」という単語を聞いた瞬間、頭の中で薬の在庫数を数えながら説明を求める。

男性は「はい」と頷き、話しだす。

「私はラルフ。ワーウルフ族です」

「ワーウルフ族？」

「はい。今は人間の姿ですが、このように……」

「おお!？」

ラルフと名乗った男性の全身に獣のような体毛が生え、牙が生え、耳が生え、人型の狼になった。

灰色の毛並みの狼人間だ。身長も伸びているように感じる。

「……人狼の姿にも変身できます。獣人でも亜人でもない、ワーウルフという種族だと考えていただければ」

「は、はい」

ラルフさんは、再び人間の姿へ。ちなみに人狼になっても怪我は治らないらしく、裂傷はそのままになっていた。

「それでラルフさん、疫病ということですが」

「はい。村の中を流れる川がバイオスライムに汚染されたのです。川の飛沫を浴びた者や、

水を飲んだ者が病におかされ……今は全員、家から出ることもできずに苦しんでおります。私だけが唯一、疫病にかかっていなかったので、飲まず食わずで住人の看病をしていましたが……もう、どうしようもなく、助けを求めてここまで来たのです」

「そうだったんですか……ところで、どうしてここに村があると?」

「最近、キングセンチピードが大きな箱を紐で括り付けて移動しているのを見たので、近くに人里があるのかと思ひまして……その通り道に沿ってここまで来たのですが、魔獣に襲われて……命からがら、逃げてきました」

「なるほど……」

確かに以前、キングセンチピード——ムカデのセンチイがワーウルフ族を見たと言っていた。あれはラルフさんの姿だったのかもしれない。背中の怪我はやはり魔獣によるものか。

とにかく、話はわかった。

「わかりました。怪我がお辛いでしょうけど、もう少しだけ質問に答えてください。村の住人を助けましょう」

「……はい!! ありがとうございます」

まずは、情報収集だ。



ワウルフ族の村は、この村からラルフさんの足で三日ほど走った距離にあるらしい。意外と近いことに驚いた。

村には川が流れ、その川の水を引いて行う農業がメイン産業とのこと。だが、バイオスライムという人体に有害な成分を持つ魔獣が川に棲み着き、水が汚染。農作物は全滅し、村人もバイオスライムの毒素にやられてしまったそうだ。

対策としては、バイオスライムの駆除と住人の治療。

バイオスライムを駆除すれば、ひとまず川の水は数日後には綺麗になる。

だが、問題は畑の方だ。大地が汚染されれば浄化は容易ではなく、数年から数十年は作物が育たなくなってしまう。

少し悩み……思いつく。『緑龍の知識書』に畑を浄化する魔法が載っているんじゃないか？

「いやいや、さすがにそこまでは……」

俺は『緑龍の知識書』を出現させ、本をめくってみる。

『植物魔法・基礎』

○土壌回復

土が汚染されちゃって農作物が育たない!! (泣)

なら……回復させちゃおう!!

この魔法は土壌の毒素を分解して、栄養にっちゃう。

美味しい農作物、期待しているからね♪

「あるんかい!! じゃあついでにバイオスライムについても調べるか……」

○バイオスライム

毒を持ってる紫色のスライム!!

川に棲み着く厄介者。捕獲しても食べられません♪

弱点はなんと……お塩!!

川にちょっぴりお塩を混ぜるとジュジュウって消えちゃいます♪

水の味に敏感だから、一度浄化するともう安心。二度とぞこの川には棲み着かない!!

「……なるほど、塩か」

念のため、うちの村近くの川にも塩を溶かしておこう。

とりあえず、これで対策方法はわかった。

まず、バイオスライムの毒を中和する薬を調合する。幸い、シエラ様こと緑龍^{りよくりゅう}ムルシエラゴ様からもらった本の中に、その情報はあった。材料も村にあるものや近くに自生している薬草だったので、なんとかなりそうだ。

ラルフさんの村には二百人ほどのワーウルフが暮らしているらしい。最低でも二百人以上の薬を調合しなくちゃいけない。

俺は身の回りの世話をしてくれている銀猫^{ぎんねこ}族のシルメリアさんに頼^{たの}み、村の住人たちを集めてもらい「ワーウルフ族の村を救うから手を貸してほしい」と伝える。すると、全住人が迷^{まよ}わず手を貸してくれると言ったので驚いた。

さっそく数グループに分け、解毒^{げどく}剤に必要な薬草を採取^{さいしゅ}してもらったり、炊^たき出し用の野菜や新鮮^{しんせん}な魔獣^{まじゅう}の肉を準備してもらったりする。

センチの運搬^{うんぱん}用箱に炊き出し道具を積み、手の空^あいた人には解毒剤の調合を手伝ってもらった。

こうしている間にも、どんどん時間は経過していく。早く行かないと病にかかった人々が衰弱^{すいじやく}死^しする可能性もある。

俺はデーモンオーガのバルギルドさんとデアムドさんに、ワーウルフ族の村に先行するようにお願いした。

この二人は毒が効かない体質だから、バイオスライムの駆除を頼んだのである。

塩水を作り、川の上流から流すだけなので簡単だ。

ラルフさんはまだ治療を受けたばかりだったが、村までの案内を買って出た。なかなかの根性だとデアムドさんは褒^ほめていた。

ラルフさんはバルギルドさんに背負^{せお}われることに。

そして三人は村を発^たったのだった。デーモンオーガの二人のスピードなら、数時間で目的地に着くだろう。

俺たちも大急ぎで薬の調合と荷作りを進める。

準備をしている間、先発隊としてワーウルフ族の村に行くメンバーも選定しておいた。

まずは当然、俺。それに加えて魔犬^{まけん}族のベイクドさん、護衛^{ごゑい}としてデーモンオーガのノーマちゃんとキリンジくん、銀猫族が二十人ほどだ。

センチに乘れる人数には限りがあるからな。まずはこのメンバーを運んでもらい、あとから追加の人員を連れてきてもらう予定だ。

ベイクドさんを最初に連れていく理由は、ワーウルフ族の村までの道案内をしてもらうためだ。

魔犬族の嗅覚は、全獣人の中でもトップクラス。バルギルドさんたちの匂いを追跡すれば、道中で迷うことはない。あとは通った道をセンチに覚えてもらい、往復する。

日が暮れる少し前に、物資の準備ができた。

運搬用箱に荷物を積み、俺たちが乗る用の箱と一緒にセンチに括り付ける。着く頃には真っ暗になるだろうが、そんなことは関係ない。毒の治療は一分一秒を争うからな。

よし、ワーウルフ族を助けるぞ!!

第二章 ワーウルフ族を救え!!

箱に乗り込む直前、俺はキリンジくとノーマちゃんに言う。

「キリンジくん、ノーマちゃん、護衛をよろしくね」

「任せてくれ。父さんほどじゃないけど、毒の耐性もあるから、万が一の時には駆除も手伝える」

「あたしだって頑張るよ!! 道中で魔獣が出てきたらみんなのお土産にしてやるんだか

ら!!」

実に頼もしいね。

続いて、ベイクドさんにも声をかける。

「ベイクドさん、道案内はよろしくお願いします」

「ああ。全獣人中、最高と呼ばれている魔犬族の嗅覚を見せてやろう」

「はい。あとは銀猫族のみんな、向こうに着いたら寝る暇もないくらい忙しくなると思う。よろしく頼む!!」

「「「はい、ご主人様」」」

ベイクドさんに銀猫族のみんな。

今回は俺だけじゃない、住人全員の力が必要だ。

俺は見送りに来ていた人々にも話しかける。

「エルミナ、シェリー、ミュデイ、俺が留守にしている間、村のことは任せたぞ」

「任せなさい。それより、あんたも気を付けなさいよ」

「お兄ちゃん、頑張ってるね」

「アシュト、気を付けてね」

ハイエルフのエルミナ、幼馴染みのミュデイ、妹のシェリーがそれぞれの言葉で激励してくれた。

「ああ。任せろ」

村のことは彼女たちに任せれば安心だ。

続いて、ローレイとクララベルにも挨拶した。

「ローレイ、クララベル、子供たちをよろしくな」

「ええ。アシュト、気を付けてね」

「お兄ちゃん、怪我しちゃヤダよ？」

「うん、行ってくる」

俺は先発隊メンバーと一緒にセンチの箱に乗り込む。

「センチ、往復で大変かもだけど、よろしく頼む」

『任せてください、ワイの逃げ足を見せたるで!!』

「いや、逃げ足じゃないけどな……」

まあいいか。先発隊、ワーウルフ族の村に向けて出発だ!!



相変わらず、センチの乗り心地は最悪だった。

到着したのは夜遅く。

立ち並んでいる家は、一軒一軒明かりが灯っている。村の全容はよくわからないが、とにかく片っ端から治療している。

センチから降りて歩きだすと、村の中央広場にバルギルドさんとダイヤモンドさん、杖をついたラルフさんがいた。

「遅くなりました!!」

「村長、水の浄化は完了したぞ」

「塩水を流したらバイオスライムは溶けてなくなった。試しに水も飲んだが、問題ない」
バルギルドさんとダイヤモンドさんが言った。

「わ、私も飲んだが、特に異常はなかった……くっ」

ラルフさんも苦しげに言い、怪我が痛むのか傷口を手で押さえる。

「お前はもう寝ている。怪我人のくせに頑張りすぎだ」
ダイヤモンドさんはラルフさんを担いで、近くの建物に入った。どうやらそこがラルフさんの家らしい。

俺はみんなの前に立ち、大声で指示を出す。

「さっそく治療を開始します!! バルギルドさんはセンチから荷物を降ろしてください。銀猫族たちは教えた通りの手順で、ワーウルフたちに薬を飲ませて!! 手分けして行くぞ!!」

銀猫族たちが解毒剤を持って、明かりの点いている家に向かう。バルギルドさんには荷降ろしが終わったあと、村の中央に櫓やぐらを組んで火を熾おこしてもらった。大きな篝火かがりびは安心感を与えるし、これから来るであろう後続組への目印にもなる。

俺もスライム製試験管に入った解毒剤を持ち、近くの家に入る。

中には、やせ細ったワウルフ一家が寝込んでいた。

父親、母親、女の子だろうか。熱にうかされて苦しんでいる。

さっそく吸い飲みで解毒剤と三種のハーブ粉末を入れ、ぬるま湯で溶かして混ぜた。これなら解毒しながら体力を回復できる。

俺は女の子を抱き上げる……軽いな。

「ふあ……」

「大丈夫？ ほら、ゆっくり飲んで……ゆっくり、ゆっくりね」

「ん、ふ」

少女は、こくんと解毒剤を飲んだ。

父親と母親にも同じように飲ませ、様子を観察する。

「……よし、呼吸が安定。青ざめていた顔色も戻ってきた。解毒剤が効いたみたいだな」

少しだが、体力も回復しただろう。

このまま熱が下がれば安心だ。

「よし、次の家に行くぞ」

俺は、片っ端から解毒剤を飲ませて回った。



「なんとか、解毒は終わったか」

銀猫たちの協力もあり、ワウルフ族全員の毒の治療が終わった。

幸い、死者はいなかった。ワウルフ族が体力のある種族で助かった。

解毒剤を飲ませてからも油断できない。その後も、俺は徹夜で村中を回った。

真夜中に後続組の銀猫族が来たので、先発隊の銀猫族と交代させて看病に当たらせる。

やがて太陽が昇り始めた頃、全員が峠とうげを越したことを確認する。

俺は朝日を浴びながら、全ての銀猫たちとバルギルドさん、ダイヤモンドさん、バイクドさんを集めて指示を出した。

「手分けして次の作業に移る。まず先発隊は家を回って、患者の身体を拭いてあげてくれ。

服や下着、布団やシートも交換してほしい。後続組は炊き出しの準備を頼む。デーモンオーガの皆さんとバイクドさんは、もう一度川をチェックをお願いします」

再び、作業が始まった。

村の中央に即席の竈を作り、消化のいいシチューを大量に用意する。今朝、様子を見た
ら、お腹を空かせているワーウルフがたくさんいたからね。

指示を出したあと、俺は怪我をしているラルフさんの家に診察へ行く。
中に入ると、ベッドにうつ伏せで寝ていたラルフさんが起き上がった。

「アシウト村長!!」

「そのまま動かないで。怪我の具合を診察します」

そう言って、傷口をチェックする。

とりあえず、怪我は大丈夫みたいだ。

明日には背中に塗っておいた薬液が固まって、剥がせるようになるだろう。

「あの、住人は」

「大丈夫。一人も死者はいません。みんな快方に向かっていますよ」

「おお……」

「さ、怪我を治すためにも栄養を摂らなくちゃ。もうすぐ炊き出しの準備ができますから、
食事にしましょう」

「はいっ……ぐ、うう」

あらら。ラルフさん、泣きだしちゃったよ……ま、この人が一番頑張ったからな。
さて、村人はこれでよし。

第三章 新たな食材との出会い

持ち込んだ食材をふんだんに使い、身体に優しいシチューをタップリ用意する。
シチューが出来上がる頃にはワーウルフ族の男性はなんとか動けるようになり、自らの
足で取りに来た。女性や子供たちの分は銀猫族に運んでもらう。

なお、シチューは好評だった。何せ、料理上手の銀猫族が作っているんだからな。

俺もシチューをもらい、村の中央にある篝火の近くで食べる。

そこで、ようやく村の姿を落ち着いて見てみた。

まず、家の形が見慣れない。

屋根に藁のような植物を使っており、壁は木の枠組みに粘土のようなものを塗りつけて
乾燥させている。うちの村とは建築方法が全然違う。

「ドワーフを連れてくりゃよかったな」

と、独り言。まあ家は別にいいや。

それより、問題はまだ残っている。

ラルフさんに確認したら、村の食料の備蓄はそこそこあるらしい。バイオスライムに汚

染された水を引いた畑も、俺の魔法で整備すれば問題ない。

ただ、次の作物を収穫できるようになるまで、備蓄だけで過ごさなきゃならないのは辛いだろう。

その時、横から声をかけられる。

「アシウト様、よろしいですか」

「あ、はい」

「初めまして。ワーウルフ族のヴォルフと申します」

俺に頭を下げたのは、体格のいい男性だった。

確か、診察中に見た顔だな。寝たきりだから身長とか気にしてなかったけど、かなりデカイ。

「情けない話ばかりで申し訳ないのですが」

「村の食料、ですね」

「はい」

俺はシチュー皿を近くの銀猫族に渡し、ヴォルフさんと話を始める。ちなみにヴォルフさん、ユルフさんのお兄さんだそうだ。

「ワーウルフ族の主食である『コメ』は川が汚染される前に収穫を終えたので、備蓄は問題ないのですが……その他の農作物は収穫前だったために全滅してしまいました。狩

りをするにも、腕の立つワーウルフはまだ動けず……」

「わかりました。農作物はうちの村で手配します。肉はデーモンオーガの方々に狩りをしてもらい、保存が利く燻製を作りましょう。ワーウルフたちが体力を取り戻すまで……そうですね、二十日分ほどの肉があればいいでしょうか？」

「え……あ、ね、願ってもないお話ですが、その」

「じゃあさっそく手配します。無理のない範囲で、動けるワーウルフたちを集めて燻製の準備をお願いしますか？」

「は、はい」

「よし。じゃあ俺は畑の整備をしますか」

俺は村の外れにあるという畑地帯へ向かいながら、思った。

「……コメってなんだろう」



バルギルドさんたちに狩りをお願いしたあと。

一人で畑にやってきたはいいが、俺は目の前の光景に首を捻っていた。

農作物が腐っている方の畑はまあいい。『土壤回復』をかけて土を混ぜ合わせれば肥料

俺はその手を掴んで立ち上がる。

「アシュト様。これほどの土を一瞬で作り出すとは、感服しました」

「は、はい。ええと、大地の汚染も消えたはずですので、このまま農業を再開して構いません。でも皆さんはまだ衰弱していますので、あまり無理はなさらないように」

「はい!! ありがとうございます。ワーウルフ族を代表して礼を言わせていただきます」
その後、ヴォルフさんに案内してもらい、他の場所にあつた畑にも『土壌回復』を使う。こうして、ワーウルフ族の畑は全て回復した。

川を確認して戻ってきたバルギルドさんたちによると、バイオスライムの影響も完全に消えたようだ。塩だけでこうも変わるとはなあ。

それから村に滞在し、炊き出しを行いながら経過観察すること……四日間。

驚くことに住人全員が回復した。どうやらワーウルフの回復力は、獣人や亜人に匹敵するらしい。

ラルフさんも怪我が完治し、炊き出しを手伝っている。

住人の中で最も症状の重かったのはワーウルフ族の長老だったのだが、彼も無事元気になった。

俺は今、長老の家に上がり、すっかり健康になった長老と向かい合っている。

「アシュト様。ワーウルフ族の危機を救っていただき、誠に感謝しております」

「いえ。死者が一人も出なくて安心しました」

大人も子供も老人も、誰も死ななかった。

ワーウルフ族が体力に恵まれた種族だからかもしれないが、それでも犠牲が出なかったのは素直に嬉しい。

「お礼に我々にできることがあれば、なんでも仰ってください」

「そうですね……では、いくつか質問をしてよろしいでしょうか?」

「構いません。なんなりと」

「では、『コメ』ってなんでしょう?」

ずっと治療に忙しくて聞けていなかったが、けっこう気になっていたことだ。

俺の知らない農作物。もしかしたら新たな交易ができるかも。

「コメとは、我らワーウルフ族の主食です」

「主食? パンのような?」

「現物をお見せした方が早いでしょう。もうすぐ夕食の時間です、よろしければワーウルフ族の料理をお召し上がりください」

「では、お言葉に甘えて」

ワーウルフ族の主食か……なんだろう。



その日の夜。俺たちは村の中央広場に設けられた宴席用のテーブルについていた。外に準備した竈で、すっかり回復したワーウルフの奥さんたちが、コメとやらを使った料理を作っている。

銀猫族たちは案内された席に大人しく座っているが、もてなされるのに慣れてないのか、手伝いたそうにウズウズしている。

俺の隣には、回復したラルフさんがいて、竈の脇に置かれてある白くて小さな粒を指さした。

「アシユト様、あれが我らの主食である『コメ』です」

「へえ。あの白いやつが、ですか？」

「ええ。あれを炊くとふつくら柔らかに仕上がるのです」

「はあ、なるほど」

それっぽく相槌を打ったが、正直よくわかってない。

ワーウルフの女性陣は大きな鍋に大量のコメを入れ、よく洗ったあと水と一緒に弱火にかけた。

その横では別の鍋で、肉と野菜の炒め物やゴロゴロした野菜を入れたスープを作っている。あつちの料理はわかりやすいな。

やがて、コメを入れた鍋がシューシューと音を出し始め、白い泡が溢れてきた。

「鍋の中のコメが水を吸って、大きく膨らんでいるのです。まあ、ご覧下さい」

ラルフさんに促され、鍋の近くへ。そして鍋を開けると……

「うわ……すげえいい匂い」

固そうな白い粒だったコメが、ふつくらと炊き上がっていた。

ラルフさんがヘラでコメをかき混ぜ、小皿に取り分けて俺に差し出す。

「アシユト様。味見を」

「……いただきます」

コメを一口で口の中へ……うん、美味い。柔らかくモチモチ、噛めば噛むほど甘い。

これ、なんにでも合いそうだ。スープカレーとかにも合いそう。

「美味しい……これが、コメ」

「はい、ワーウルフ族の自慢です!!」

ラルフさんは、誇らしげに胸を張った。

ワーウルフ族の料理は、さっそくみんなに振る舞われた。

銀猫たちは食事もそこそこに、調理をしていたワーウルフのおばちゃんに群がり、コメ

を使った調理法を聞き出している。

「コメはどんな料理にも応用が利くよ。卵と炒めればパラパラになるし、塩気のあるものならなんにでも合う。余ったら握^{にぎ}って固めれば弁当にもできるね」

「ふむふむ……あの、よろしければ、いくつかレシピを教えていただけないでしょうか？」

「もちろんさ。ふふふ、銀猫族が真面目^{まじめ}で勤勉^{きんべん}って噂はホントみたいだねえ」

ワールフのおばちゃんは楽しそうに笑っていた。

俺は、少し離れた場所に座るワールフ族の長老のところに行く。

「あの、このコメをうちの村と取引してほしいのですが」

「もちろん構いません。コメだけは山ほど備蓄してあるので、いくらでも差し上げますよ」

「いえ、いただくのはさすがに。こちらから差し上げられるものは……」

長老と話し合い、うちからは果実とワインを交易品として出すことになった。なんでも、ワールフ族の村では果物類を育てていないらしく、森で採取するのがほとんどだから貴重なのだとか。

それとは別に、長老からお願いを受けた。

「アシユト様は素晴らしい薬師^{くすりし}とお見受けします。此度^{こたび}も我らワールフ族の危機を救っていただいて、感謝してもし切れません」

「いやいや、そんな……ははは」

「そこで、お願いがございます」

「はい？」

その言葉を受け、長老の隣にいた青年……いや、ギリ少年くらいか？ が、一歩前に出た。

灰色の髪にメガネをかけた、大人しく優しい男の子だ。たぶん十五、六歳くらいだろう。

「初めまして。フレキと申します」

フレキと名乗った少年は、丁寧^{ていねい}に一礼する。

すると、長老が言う。

「この子は薬師見習いでして、ワールフ族イチの秀才^{しやうさい}なのです。どうかアシユト様、この子をあなた様の弟子^{でし}にしてくださいませんか」

「え？」

「お願いします。ボク……アシユト様、いえ、師匠^{ししょう}のような薬師になりたいんです!!」
フレキくんが目を輝かせて言った。

お、俺の弟子？ ま、まじで？

翌朝、俺たちはコメをたつぷりセンチに積み込み、村に帰ることにした。ワーウルフ族の村はもう大丈夫だろう。

俺はセンテイに乗る前、長老とがっちり握手あくしゅする。別れの挨拶としてだけではなく、ここからの取引相手としての握手でもある。

「いえ、このコメをいただけただけで嬉しいです。それと、これからよろしくお願いします」

「は、はい。その、俺にできることなら」

俺と長老の視線は、すでにセンチに乗っている二人のワーウルフへ。

一人は灰色の髪にメガネをかけた賢^{かしこ}そうな少年、フレキくん。もう一人は十歳くらいの子、灰色のロングヘアの少女、アセナちゃん。二人は兄妹である。

ま、それはおいおい。

「え」

なんと、長老は人狼へ変身。それが合図だったかのように、他の住人もほぼ全員が変身した。

俺がセンチに乗り込むと、人狼たちは雄叫おたけびを上げる。

「『『『『ウオオオオオー————ンツ!!』』』』」

これが、ワーウルフ流の見送りというわけか。

俺は雄叫びにビビったセンチを促し、ワーウルフ族の村をあとにした。



数時間で村に到着。数日ぶりに戻ってきた俺たちは、住人たちに歓迎された。

「ただいま」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おかえりなさい、ご主人さまっ」

「お兄ちゃんおかえりー」

シルメリアさん、銀猫族の少女ミュアちゃん、魔犬族の少女ライラちゃんが最初に出迎えてくれた。シルメリアさん、ご主人様の出迎えをするのは自分が先だとも言うように、みんなより一歩前に出ている。

そしてその後ろにいるのは……

「お帰りお兄ちゃん、身体は大丈夫？」

「お帰りなさい、アシュト」

シェリーとミュデイだ。

疫病の蔓延^{はびこ}っていた村からの帰りだからか、心配そうにしている。

もちろん、俺は病気にはかかってない。というか、実際の原因は毒だったわけだし、^{かん}感染の心配はなかったな。

「お帰りなさい、アシュト」

「お兄ちゃん、おかえり」

「まんどれーいく」

「あるらうねー」

続いて近寄ってきたのはローレイとクラベル、マンドレイクとアルラウネだ。

こっちはいつも通りの感じ。でも、心配して泣かれるよりはいいか。

そして、全員の視線が俺の後ろにいる二人のワールフに移る。

ミュデイが首を傾げ、代表して聞いてきた。

「その子たちは、お客さん？」

「お客さんというか、移住者かな。フレキくとアセナちゃんだ」

俺がそう言うのと、フレキくんたちは前に進み出た。

「初めまして。ワールフ族のフレキと申します。師匠のもとで薬師の技術を学ぶため、この村に来ました。どうかよろしくお願いします!!!」

「初めまして。アセナと申します。兄さんのお世話役として来ました」

しつかり一札するフレキくんと、ちょこんとお辞儀^{じぎ}するアセナちゃん。

ミュデイが驚きつつ尋ねる。

「し、師匠って……アシュトのこと？」

「はい!! ボク、村を救ってくれたアシュト師匠のような薬師になりたいんです!!」

「ってわけで……はは、俺でいいのかなあ」



師匠と呼ばれるのは照れくさい。

すると、シェリーが軽く言った。

「ま、お兄ちゃんなら平気でしょ」

「お、おいおいシェリー、無責任なこと言うなよ。師匠って言われても」

「……あのねお兄ちゃん。お兄ちゃんはビッグバログ王国の最年少薬師でしょ。お父さんはまったく興味を示さなかったけど、十六歳で薬師の資格を取って、十七歳で新薬を開発して博士号も取るってすごいことなんだよ？ 王宮薬師に推薦するなんて話もあったんだから」

「……………え、そうなの？」

「そうだよ。お兄ちゃん、研究、研究に勉強、勉強で、自分の評判なんてまったく興味なかったでしょ？ シヤヘル先生、かなり落ち込んでたわよ」

「う……シヤ、シヤヘル先生か」

シヤヘル先生は、王宮の温室の世話を任されていたエルフの先生だ。俺の薬師としての教師でもあったんだけど………なんの挨拶もしないままオーベルシュタイン領土に来てしまった。

今更だが、ビッグバログには世話になった人が山ほどいるのに、挨拶も碌にしない。

と、その時フレキくんが目をキラキラさせて言ってきた。
「す、すごい……十六歳って、ボクと同じ年齢です。その頃から師匠は薬師として活躍されていたのですね!!」

「あ、あはは……まあそうだね」

「改めて尊敬します!!」

フレキくんはそう言つて頭を下げる。

なんというか、素直でいい子なのかも。

「とりあえず、住む家を手配しようか。シルメリアさん、空き家はあつたよね」

「はい。お弟子さんということなら、ご主人様のご自宅に近い方がいいでしょう。さっそく手配いたします」

「よろしくお願いします。それと……」

俺は、ぴちつと立っているアセナちゃんを見た。

「兄さんのお世話はわたしの仕事です。お任せください」

「あー……いいの？ フレキくん」

「はあ……アセナ、お前はまだ半人前なんだ。あまり無理は……」

「していません。炊事洗濯などの家事は一通りこなせます。兄さんは何も気にせず、薬師としてのお勉強をしてください」

ツンとした口調で喋るアセナちゃん。

そんな彼女を、ミュアちゃんとライラちゃんが興味津々といった風に見ていた。

同年代の女の子だし、友達になりたいのかも。

「兄さん、わたしのことはお気になさらず」

「……はあ、まったく」

フレキくんは頭を抱えてしまった。

本来、アセナちゃんはここに来る予定じゃなかった。

フレキくんは家事がまるでできない。銀猫族のサポートを提案したが、年頃の少年だし、若い銀猫族にあれこれしてもらうのはさすがに恥ずかしいらしい。

そこで、家事をこなせる妹のアセナちゃんも一緒に連れていくことに……というのは建前だ。

フレキくんがあとでこっそり教えてくれたのだが、お兄ちゃんっ子のアセナちゃんは、フレキちゃんと離ればなれになるのが寂しかったらしく、出発前夜に無理矢理同行をお願いしたとか。

フレキくんはこっそり話しかけてくる。

「申し訳ありません師匠。しばらく二人で生活してみます。どうしても無理なようならば、お手伝いをお願いするかもしれません」

**立ち読みサンプル
はここまで**

「ああ、わかった。その時は遠慮しないで頼ってくれ」

「はい。ありがとうございます」

それにしても、俺が師匠か……

成り行きで受けたけど、師匠と呼ばれるからにはちゃんとやらなとなあ。ワーウルフ族の村には薬師がいらないらしいので、フレキくんを育てて、ワーウルフ族の村の薬師第一号にするつもりだ。

まあ先のことは置いて、とりあえず今日は歓迎の宴を開こうかな。

第五章 アシュト師匠と弟子のフレキ

「おはようございます、師匠!!」

「うおっ」

翌朝。温室の手入れに行こうと家を出たら、フレキくんがドアの前で待っていた。朝から目をキラキラさせて俺を見ている。

「お、おはようフレキくん。早いね」

「はい!! 師匠が早朝に温室の手入れをすると昨夜仰っていたので、こうしてお待ちして

いました!!」

「そっか。やる気いっぱいだね」

「はい!!」

やる気満々なのはいいことだ……というか声デカいね。

俺に学ぼうと、慣れ親しんだワーウルフ族の村から出てきたフレキくん。

同族のいないこの村で暮らすのは何かと不安だろうが、早く一人前になって帰れるように、俺の教えられることはしっかり教えようと改めて決意する。

「よし、じゃあ行こうか」

「はい!!」

「温室の手入れしたら朝食だけど、朝ご飯はどうする?」

「あ、それなら大丈夫です。アセナが作っていますので」

「え、あ、アセナちゃんか?」

「ええ。ああ見えて、アセナは料理上手なんですよ」

そう言ったあと、フレキくんの視線は俺の足元へ。

「おはようございます。ええと、マンドレイクさん、アルラウネさん」

「まんどれーいく」

「あるらうねー」